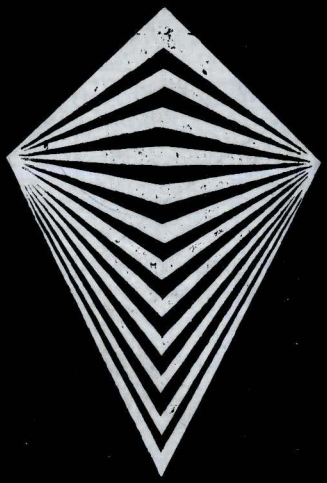
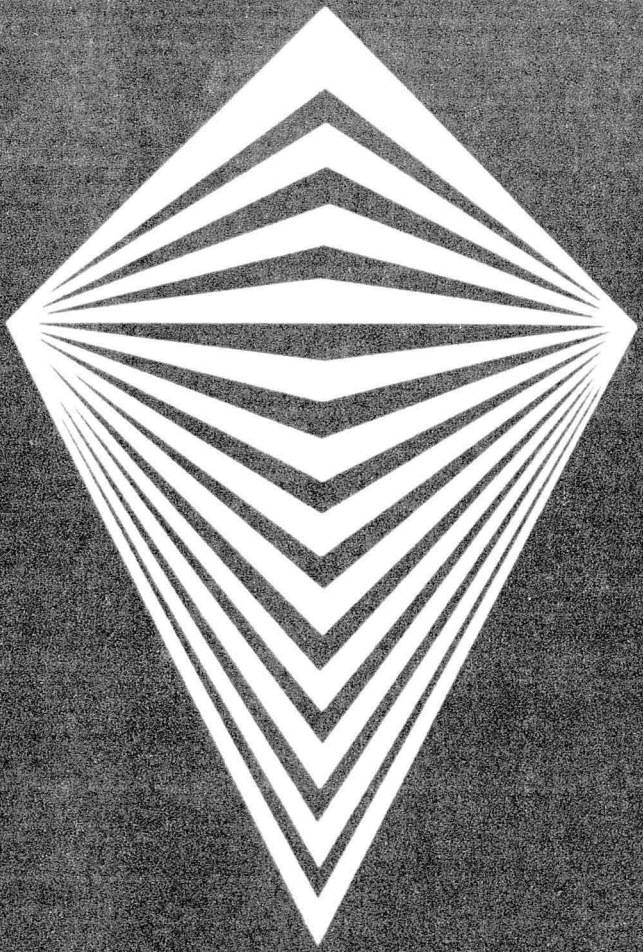


ルブラン



世界推理小説大系　9　東都書房

訳者紹介

石　川　　湧

１９０６年栃木県に生る
東京外国語学校フランス語部卒
外務省，共同通信社嘱託を経て
現在東京学芸大学教授
訳書にアランの「幸福論」他多数
推理小説の翻訳に本大系７「ルルー」その他

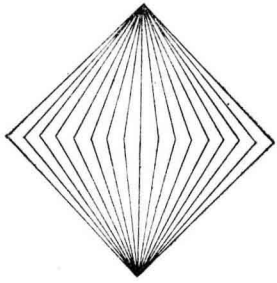
世界推理小説大系第９巻
ルブラン　　定価５６０円

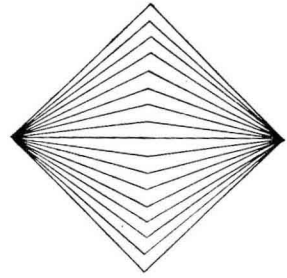
昭和38年10月25日第１刷

著　者　M. ル ブ ラ ン
訳　者　石　川　湧
発行者　西　村　俊　成
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　東　都　書　房
東京都文京区音羽町３—19
電　話　(942)　１１１１
振替東京　７２７３２

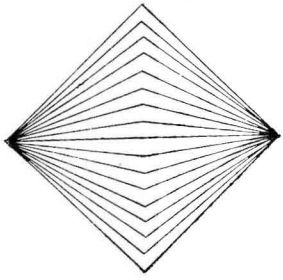
落丁本・乱丁本はおとりかえします

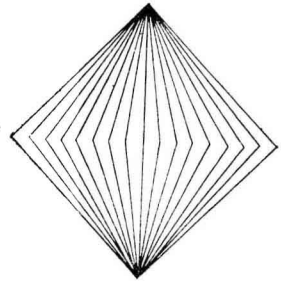
© Y. Ishikawa



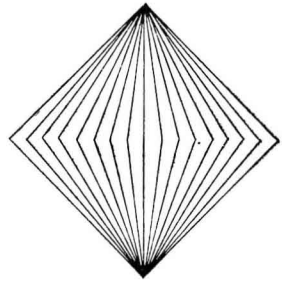


目次



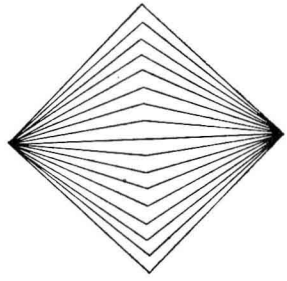


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



怪盗紳士アルセーヌ・ルパン

石川　湧訳



怪盗紳士アルセーヌ・リュパン

リュパンの逮捕

奇妙な旅行だ！　最初はとても調子がよかったのに！　ぼくとしては、こんなに幸先のよい旅行は一度もなかった。プロヴァンス号は大西洋航路の快適な快速船で、船長はこの上なく愛想のよい人間だ。乗客も申し分のない上品な人たちだった。乗客たちは知合いになり、いろんな娯楽がもよおされた。ぼくらは世間を離れ、まるで未知の島に孤立して、たがいに親しみ合わざるを得ないような、よい気分になっていた。

で、ぼくらは親しくなった……

前の日までは知りもしなかったのに、涯知れぬ空と海とのあいだで数日のあいだ、親しく生活し、いっしょになって大洋の怒り、波のおそろしい攻撃、また、よどんだ水の腹ぐろい静けさに立ちむかう、そういう一団の人人のなかで、どんなに風がわりな、思いがけないことがおこるか、あなたは考えてみたことがありますか？

それは結局、人生そのものを悲劇のように要約して生きることであって、人生の嵐も偉大さもあれば、その単調さも複雑さもあるのだ。たぶん、それだからこそ、最初からその結末の見えているこんな短い旅行を、人はいきおいこんで、たのしみ味わうのである。

けれども、数年来この航海の興味をさらにいっそう高めているものがある。この小さな浮島のような汽船は、乗客が逃れだしたと思っている世界に、やはりつながっているのである。大洋のまっただなかで、少しずつほどけるつながりは、大洋のまっただなかで、ふたたび少しずつむすばれる。無線電信がある！　別の世界から、忽然とニュースが送られる。想像力は、目に見えぬ通信をつたえる電線などを思いうかべる必要がなくなったのだ。不思議はもっと測り知れぬものとなり、またさらに詩的なものとなって、この新しい奇跡を説明するには、風のつばさに頼らなければならない。

こうして、最初のうち、われわれは、ときどき遠方のことばをささやくこの遙かな声によって跡をつけられ、護送され、先回りさえされるような気がしていた。二人の友人がぼくに話しかけた。さらに十人、二十人が、われわれみんなに、空間を通して、悲しい、あるいはたのしい、別れのことばを送ってきた。

ところで、二日目、あらし気味の午後になって、フランスの海岸から五百マイルのところで、つぎのような電信がつたえられた。

《貴船一等室ニあるせーぬ・りゅぱんアリ。金髪、右前腕ニ負傷。同行者ナク、変名シテR……》

ちょうどそのとき、くらい空に、はげしい雷鳴がおこった。電波は中断された。電報の最後は不通となった。アルセーヌ・リュパンの変名は、頭文字しかわからない。

ほかのニュースだったら、電信従業員も、水上警察官も、船長も、厳重な秘密を守ったにちがいない。しかし、どんな用心ぶかさを

もってしても隠しきれない事件というものがあるものだ。その日のうちに、どういうふうに洩れたのかはわからないが、われわれは一人のこらず、有名なアルセーヌ・リュパンが乗客のなかにいることを知ることができたのである。

アルセーヌ・リュパンがここに！　数ヵ月前から、その大胆さがあらゆる新聞で報じられていた、あのつかまらない怪盗！　腕ききの警部ガニマール老が、奇々怪々な死闘の相手としている謎の人物！　城館やサロンをしか荒さないふしぎな紳士。この男はある夜、ショルマン男爵邸にしのびこみ、何もとらずに、《家具が本物になったときにまた参上します、怪盗紳士アルセーヌ・リュパン》という名刺を残して立ち去った。運転手、テノール歌手、馬券屋、良家の子弟、若者、老人、マルセーユの外交員、ロシア人医師、スペインの闘牛士――何にでも変装する男、アルセーヌ・リュパン！

考えてもごらんなさい。大西洋航路の定期船という比較的にせまい枠、いや、すぐにでも見つかってしまうような一等船室の片隅、この食堂、このサロン、この喫煙室に、アルセーヌ・リュパンが行ったり来たりしているとは！　アルセーヌ・リュパンは、ことによるとこの紳士かもしれない……それとも、あの紳士かな……食卓でぼくのとなりにいる男……ぼくの船室の相客かもしれない……

「それがまだあと五日間もつづくなんて！」と、あくる日、ネリー・アンダーダウン嬢がさけんだ。「たまらないわ！　早くつかまればいいのに」

それから、ぼくにむかって、

「ねえ、あなた、アンドレジーさま、あなたはもう船長とずいぶん親しくおなりなのに、まだわかりませんの？」

ネリー嬢の気に入るために、ぼくはすこしようすを知りたかった。ネリー嬢は、どこへ行ってもたちまち一座の注目をあつめるという、すばらしい婦人たちの一人なのだ。美しさばかりでなく財産もある。とりまき、ファン、心酔者がいるという婦人の一人だ。

フランス人の母親にパリで育てられた彼女は、シカゴの大富豪である父親アンダーダウンのところへ行く途中なのだ。友だちの一人ジャーランド夫人を同伴している。

はじめて見たときから、ぼくはさっそく彼女の崇拝者として立候補した。しかし、みじかい旅行中に急速にむすばれた親しさのなかで、彼女の大きな黒い目で見つめられると、ぼくはたちまち彼女の魅力になやまされ、かりそめの浮気心にとっては強すぎる感動を受けた。それでも彼女は、ぼくのお世辞を、かなり好意的に受けてくれた。ぼくが気のきいたことを言うと笑ってくれ、ぼくの世間話に興味を抱いてくれた。ぼくが彼女にいんぎんさを示すと、ほのかな共鳴の反応があるように思われた。

心配な恋敵は、たった一人――かなり美貌の、つつしみぶかい上品な青年だった。彼女は時折りは、ぼくのパリジアン的な《あけすけな》態度よりも、この青年の無口な性質を好むらしく見えたのである。

彼女がぼくにあの質問をしたとき、青年はちょうどネリー嬢のとりまき連中のあいだにくわわっていたのである。ぼくらは甲板で、気楽にロッキング・チェアーに腰かけていた。前日のあらしで、空はきれいに拭われていた。たのしい時間だった。

「はっきりしたことは何も存じませんよ、お嬢さん」と、ぼくは答えた。「でも、リュパンの宿敵ガニマール老がやりそうな捜査を、ぼくら自身でやれないでしょうか？」

「まあ！　そんなこと！」

「どうしてですか？　問題はそんなに複雑ですかね？」
「たいへん複雑ですわ」
「それはあなたが、問題解決の要素を忘れていらっしゃるからですよ」
「どんな要素？」
「第一。リュパンはR……氏と名乗っていること」
「それだけでは、あまり漠然としていますわ」
「第二、一人旅であること」
「ただそれだけでは……」
「第三。金髪であること」
「それで？」
「それで、ぼくらは船客名簿をしらべて、該当しない者の名を消せばよいのです」
　ぼくはその名簿を、ポケットに持っていた。それをとりだして、めくった。
「まず頭文字があてはまるのは、十三人しかおりません」
「たった十三人？」
「そうです、一等には。この十三人のR……このうち、ごらんのとおり、九人は、夫人、お子さん、あるいは召使を同伴しています。単身なのは四人だけで、ラヴェルダン侯爵は……」
「大使館書記官」と、ネリー嬢がことばをはさんだ。「あたくし、存じておりますわ」
「ロウスン少佐……」
「わたしの叔父です」と、だれかが言った。
「リヴォルタ氏……」
「はい」と、一人が叫んだ。顔をまっくろなひげに埋めているイタリア人だった。
　ネリー嬢は笑いだした。
「このかたは金髪ではございませんね」
「それじゃ」と、ぼくがつづけた。「犯人は最後の人だと結論せざるを得ませんな」
「と言いますと、つまり？」
「つまり、ロゼーヌ氏です。どなたかロゼーヌ氏をご存じですか？」
　みんな黙っていた。しかしネリー嬢は、彼女につきまとって、ぼくを妬かせていた無口な青年を呼んで言った。
「さあ、ロゼーヌさん、ご返事なさいませんの？」
　みんながかれに目をむけた。かれは金髪だった。
　正直なところ、ぼくは心の底にショックのようなものを感じた。みんなが重くるしく黙っているのを見ると、ほかの人たちも同じようなショックを受けたにちがいない。しかし、それはばかばかしいことだった。なにしろ、この紳士の態度には、どこと言って疑われるふしはないのだ。
「なぜ返事をしないかっておっしゃるんですか？」と、かれは言った。「だって、ぼくは名前からも、一人旅であることからも、髪の色からも、これとおなじような調査を受け、おなじ結果になったことがあるからですよ。だから、ぼくを逮捕すればいいんです」
　こう言いながら、かれはおかしなようすをした。二本の直線のようにうすい唇は、さらにいっそう細くなり、青くなった。目が赤く血走った。
　たしかに冗談を言っていたのだ。しかし、かれの人相、かれの態度は印象的だった。ネリー嬢は素朴にたずねた。
「でも負傷していらっしゃいませんね？」
「そうです」と、かれが言った。「負傷はありません」
　かれは神経質な身振りで、袖をまくり、腕を出して見せた。だが、ぼくはすぐにはっとした。ぼくはネリー嬢と目を見かわした。かれは左腕を見せたのである。
　ところが、ぼくがそれを言おうとしたちょ

うどそのとき、偶然にもわれわれの注意をそらす事がおきた。ネリー嬢のともだちであるジャーランド夫人が走ってきたのだ。

彼女はあわてふためいていた。人々は彼女のまわりに集まった。それから、やっとのことで彼女は口をひらいた。

「あたしの宝石、あたしの真珠！　……みんな盗まれてしまいました！　……」

いや、あとでわかったことだが、みんな盗まれたのではなかった。それよりもおかしいことには、選んで盗まれたのだ！

ダイアモンドの星型の飾り、ネックレースのルビーのメダル、引きちぎられた首飾りや腕輪のうち、いちばん大きい宝石ではなくて、貴重なもの、場所をとらないで値段の高いものだけが取られていた。台はテーブルの上に残してあった。ぼくらはみんなで、色美しく輝く花びらをむしられた花のように、宝石をぬきとられた装身具を見た。

そして、この仕事をやってのけるためには、ジャーランド夫人がお茶をのんでいるあいだに、まっぴるま、人の行き来の多い廊下で、船室のドアをこじあけ、帽子の箱の底にかくしてあった手提袋を見つけ、それを開いて、えらばなければならなかったのだ！

われわれはみんなあっと叫んだ。この盗難事件が知れると、すべての乗客が一致して考えた――アルセーヌ・リュパンだと。そして事実、それはまさしくリュパンの手のこんだ、不思議な、不可解な……しかもつじつまの合った手口だった。と言うのは、宝石全部なら、かさばって隠すのがむずかしいだろうが、ばらばらの直珠やエメラルドやサファイアなど、こまごました物なら、はるかに楽だったろうからである。

それから、夕食のとき、こういうことがあった――ロゼーヌの左右には、二人分の座席があいていた。そしてその晩、かれは船長に呼ばれたことがわかった。

みんなはロゼーヌが逮捕されたことと信じて、ほんとうに安心した。やっと息がらくにつけた。その晩はみんな遊びをたのしんだ。ダンスもした。とりわけネリー嬢はひどく陽気で、ぼくはロゼーヌのお世辞が、初めのうちこそ彼女の気に入りはしたものの、彼女はもう忘れてしまったのだろう、と思った。彼女の優雅さに、ぼくはすっかり参ってしまった。夜半ごろ、あかるい月光の下で、ぼくは彼女に情熱をこめて一身をささげることを誓ったが、彼女もまんざらではないらしかった。

けれども、あくる日、ロゼーヌが証拠不充分で釈放されたということがわかると、みんなはあきれてしまった。

かれはボルドーの相当な商人の子として、完全にととのった書類を提出した。そのうえ、かれの両腕には傷のあとなどは全然見られなかったのである。

「書類！　出生証書！」と、ロゼーヌの敵たちはわめいた。「アルセーヌ・リュパンなら、そんなものは、いくらだって出して見せるだろうさ！　負傷なんぞ、受けなかったか、それとも、傷跡を消してしまうかしたんだろうよ！」

これに対しては、盗難のあった時刻に、ロゼーヌは甲板を散歩中だった、という反対論があった。そうすると、こんどは、「アルセーヌ・リュパンほどの人物が、現場で手をくだす必要があるかね？」という反論があった。

それに、ほかのことはともかくとして、どんなに疑い深い人間だって文句の言えない点が、一つはあった。ロゼーヌ以外に、一人旅で、金髪で、Rを頭文字としている者があるか？　電報で指名しているのは、ロゼーヌで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なくてだれだ？

食事の直前、ロゼーヌがわれわれのグループのほうへ平気でやってきたとき、ネリー嬢とジャーランド夫人とは、立ちあがって遠くへ行ってしまった。

それは確かに恐怖だったのだ。

一時間後、筆記した回章が、船の事務員、水夫、各等の船客の手から手へ渡された――ルイ・ロゼーヌ氏は、アルセーヌ・リュパンの仮面をはぐか、または盗まれた宝石を持っている者を発見した人には、一万フランの懸賞金を提供する、というのである。

「そしてもし、だれも協力してくれないなら、このわたしがつかまえてみせましょう」と、ロゼーヌは船長に言明した。

アルセーヌ・リュパン対ロゼーヌ、と言うよりはむしろ、みんなの噂ではアルセーヌ・リュパン対アルセーヌ・リュパン、この競争はさぞおもしろいだろう！

それは二日間つづいた。

ロゼーヌはあちこちと歩きまわり、従業員のなかに立ちまじり、質問をし、さがした。夜も歩きまわっているかれの影が見えた。

船長のほうでも、八方手をつくした。プロヴァンス号の上から下まで、隅々までさがした。どの船室もくまなく捜索された。それには、犯人の船室以外、品物はどこにかくされているかもしれない、というもっともな口実があったのである。

「結局、いくらかは見つかるでしょうね？」と、ネリー嬢がぼくに言った。「どんな魔法使いだって、ダイアモンドや真珠を見えなくするわけにはいきませんものね」

「できますよ」と、ぼくは答えた。「そうなると、帽子の中でも、上着の裏でも、ぼくらの身につけている全部のものを調べなくてはなりませんね」

そして、ぼくが彼女のあらゆるポーズを撮影した9×12のコダック・カメラを見せながら、

「こんなちっぽけな機械にだって、ジャーランド夫人の宝石全部を入れることができるじゃありませんか？　撮影するふりをしていれば、わかりませんよ」

「でも、何か手がかりを残さない泥棒はいないという話をききましたわ」

「一人いますよ――アルセーヌ・リュパン」

「どうして？」

「どうしてって？　リュパンは自分の犯行のことばかりでなく、正体を見破られるようなすべての状況に気をくばっているからですよ」

「最初、あなたはもっと自信がおありでしたわね」

「でも、その後、ぼくはかれの手口を見たんです」

「それで、どういうご意見？」

「ぼくの考えでは、捜査は時間をむだにするだけですね」

事実、捜査はなんの成果もあがらなかった。すくなくとも、成果は努力にむくいるものではなかった――船長の時計が盗まれたのだ。

船長はかんかんに怒って、ますます熱心にロゼーヌを監視した。それ以前に何度も取調べはしたのだが。ところが、あくる日には、皮肉にもその時計が、副船長のしまっておいたカラーのあいだで見つかったのである。

それはまるで奇跡のようなもので、アルセーヌ・リュパンのふざけた手口をよく示していた。リュパンは泥棒ではあるが、同時にディレッタント（風流人）でもあったのだ。かれはなるほど趣味と天職とによって仕事をしていたが、しかしまた、それは娯楽でもあった。まるで、自分の作品を上演させて、

舞台裏で自分の才気や、創作した場面などを、大笑いしている紳士の観があった。

かれはたしかに独特の芸術家なのである。陰気で強情なロゼーヌを観察するとき、また、この奇怪な人物が演じているにちがいない一人二役のことを考えるとき、ぼくは一種の感嘆の念をもって語らずにはいられなかった。

ところで、一昨夜、当直士官は甲板のいちばん暗い場所で、うめき声を聞いたのだ。かれは近よって行った。一人の男が、厚地の灰色の布で頭をつつみ、細紐で手首をしばられて倒れていた。

しばってある紐をほどき、起きあがらせ、念入りに手当をした。

この男、それはロゼーヌだった。

ロゼーヌは例の捜査中におそわれ、なぐり倒され、金をとられたのだ。かれの服にピンでとめた名刺には、こう書いてあった。《ロゼーヌ氏の懸賞金一万フランありがたく領収つかまつり候、アルセーヌ・リュパン》

実際は、ぬすまれた財布には千フラン札が二十枚はいっていたのである。

もちろん、犯人自身が芝居を演じたのだと考えられた。しかし、自分でこんなふうにしばることは不可能だったし、名刺の筆跡が、ロゼーヌの書体とは全然ちがっていて、反対に、船内にあった古新聞に出ているリュパンの筆跡とそっくりであった。

そこで、ロゼーヌはアルセーヌ・リュパンではないということになった。ロゼーヌはロゼーヌだ、ボルドーの商人の息子なのだ！そしてアルセーヌ・リュパンがいることは、もう一度確かめられた――しかもなんという恐るべき行為によって！

それは恐怖だった。人々はもう船室に一人でいることも、また離れた場所へ一人で行くことなどはなおさら、できなかった。おたがいに信用できる人々がグループをつくった。その上、本能的な警戒心が最も親しい人々をさえ分裂させた。それは、脅威は孤立した個人から生じたものではなかったからだ。今やアルセーヌ・リュパンは……だれもがリュパンだった。ぼくらの興奮した想像力は、奇跡的な無限の力をリュパンに賦与していた。どんな変装でもでき、尊敬すべきロウスン少佐にでも、上品なラヴェルダン侯爵にでも、あるいはさらに妻子や召使をつれた人にでも化けることができる、なにしろ頭文字などはあてにならないから――こう考えていた。

最初の無電では何もわからなかった。すくなくとも船長はわれわれに知らせてくれなかった。こういう沈黙は、われわれを安心させるものではなかった。

だから、最後の日は非常に長く思われた。人々は不幸の生ずることを心配しながらくらした。こんどは盗難なんかではあるまい。単なる襲撃などではないだろう。兇悪な犯罪、殺人かもしれない。アルセーヌ・リュパンがこんなけちな盗み二件だけでおとなしくするはずはない。当局が無力となったこの船の絶対の支配者であるかれは、なんでも好き勝手なことができるのだ。生命でも財産でも自由にできるのだ。

正直なところ、ぼくにとってはたのしい時間だった。というのは、そのあいだ、ネリー嬢がぼくを頼りにしたからである。もとから小心な彼女は、こんな事件のためにおびえて、自然、ぼくに保護と安全を求め、ぼくはそれを与えることを喜んだのである。

心の底では、ぼくはアルセーヌ・リュパンを祝福していた。ぼくら二人を接近させたのはかれではないか？　ぼくが最も美しい夢にふける権利を得たのは、かれのおかげではないか？　愛の夢と、もっと現実性のある夢――

アンドレジー家はポアトゥー地方（フランス中西部）の名門である。しかしその家名はいくらか色が褪せた。それで、家名に失われた光輝をとりもどそうと考えるのは、貴族にふさわしくないとは思えない。

そしてこの夢が、ネリーにとって少しも不愉快なものでないことを、ぼくは感じていた。彼女のにこやかな目は、ぼくにその夢を抱くことを許していた。彼女の声のやさしさは、ぼくに希望を持てと告げていた。

そしてぼくらは最後の時刻まで、てすりに肱をついて、寄りそっていた。そのあいだにアメリカの海岸線がぼくらの前を走っていた。

捜査は打ちきられた。人々は待っていた。一等船室から、移民がうようよしている三等船室にいたるまで、解けない謎がやっと解ける最後の瞬間を待っていた。アルセーヌ・リュパンとは何者か？　あの有名なアルセーヌ・リュパンは、どんな名前、どんな仮面の下にかくれていたのか？

その最後の瞬間がきた。ぼくはあと百年生きるとしても、そのときのどんなこまかい点でも忘れはしないだろう。

「なんて青い顔をしてらっしゃるんです、ミス・ネリー」と、ぼくはぐったりしてぼくの腕によりかかった相手に言った。

「あなただって！」と、彼女は答えた。「まあ！　ほんとに興奮していらっしゃるわ！」

「考えてもごらんなさい！　この瞬間は劇的ですよ。ぼくはこの瞬間をあなたといっしょに生きるのがうれしいのです、ネリー嬢。ぼくにはあなたの思い出がときどき……」

彼女は熱っぽく息をはずませ、ぼくのことばも耳にはいらなかった。タラップがおろされた。しかし、ぼくらがそれを勝手におりる前に、人々が――税関吏、制服の役人、赤帽などが上ってきた。

ネリー嬢はつぶやいた。

「アルセーヌ・リュパンが航海中に逃走したということがわかっても、あたしはびっくりしないわ」

「かれはたぶん、不名誉よりは死をえらんで、つかまらないうちに大西洋にとびこんでしまったでしょう」

「冗談はやめてください」と、彼女は不景気に言った。

とつぜん、ぼくはぞっとした。そして彼女がぼくにたずねたので、ぼくは言った。

「タラップの端に立っているあの老人が見えるでしょう……」

「傘を持って、オリーヴ色のフロックを着た人？」

「ガニマールです」

「ガニマールって？」

「ええ。有名な警察官で、アルセーヌ・リュパンを自分の手でとらえて見せると宣言した男です。アメリカ側では何の情報もなかったらしいな。ガニマールが来ているところを見ると、この事件にはだれにも手を出させたくないんですな」

「それじゃ、アルセーヌ・リュパンは確実につかまるでしょうか？」

「それはわかりませんよ。ガニマールはリュパンが変装をしたところしか見たことがないらしいのです。リュパンの変名でも知っていないかぎり……」

「ああ！」と彼女は、女にありがちなあの少し残酷な好奇心から言った。「つかまるところが見たいものですわ」

「待ちましょう。アルセーヌ・リュパンは敵がいることに、もう気がついているにちがいありません。老人の目がつかれた時をねらって、いちばんあとから出て行くでしょう」

上陸が開始された。ガニマールは、雨傘に

よりかかり、のんきなふうをして、てすりのあいだを押しあいながらおりて行く群衆などに気をつけていないらしく見えた。ぼくは、船の士官がかれのうしろに立って、ときどき耳打ちするのを見た。

ラヴェルダン侯爵、ロウスン少佐、イタリア人リヴォルタがおりて行く。それから、たくさんの人々が……そしてロゼーヌが近づいて行くのが見えた。

あわれなロゼーヌ！　かれはあの不運な事件から立ち直っていないらしい！

「でも、たぶんあの男ですわ」と、ネリー嬢が言った。「どうお思いになって？」

「ぼくは、ガニマールとロゼーヌがいっしょのところを写真にとったら、おもしろいだろうと思いますよ。ぼくのカメラを取ってください。両手がふさがっていますから」

ぼくはカメラを彼女に持たせたが、彼女がそれを使うには時すでにおそかった。ロゼーヌは通りすぎた。士官はガニマールの耳にささやいた。ガニマールはひょいと首をすくめた。そしてロゼーヌは行ってしまった。

してみると、いったいアルセーヌ・リュパンはだれだったのか？

「そうね」と、彼女は大きな声で言った。

「だれなんでしょう？」

もう二十人ぐらいしか残っていない。彼女はその二十人のなかにかれがいやしないかと、ぼんやりした不安の念をもって一人一人観察した。ぼくは言った。

「もう待っていても仕方がありませんよ」

彼女は歩きだした。ぼくも後についた。しかし十歩も行かないうちに、ガニマールがぼくらの通路をふさいだ。

「なんですか？」と、ぼくは叫んだ。

「ちょっとお待ちください。おいそぎですか？」

「ぼくはお嬢さんといっしょです」

「ほんのしばらく」と、かれは、こんどはもっと命令的な声でくりかえした。

かれはじろじろとぼくの顔を見つめ、それから面とむかって言った。

「アルセーヌ・リュパンですね？」

ぼくは笑いだした。

「いや、ベルナール・ダンドレジーです」

「ベルナール・ダンドレジーは、三年前にマケドニアで死亡している」

「ベルナール・ダンドレジーが死んだとすれば、ぼくはこの世にいないはずです。ところが、そうではない。これがぼくの書類ですよ」

「かれのだ。どうしてあなたがそれを所持しているのか、わたしが説明してもよろしい」

「あなたは気が狂っているのですか！　アルセーヌ・リュパンはRという変名で乗船したのですよ」

「そう、それもきみのトリックです。それで正体をくらましたんだ！　いやはや、たいした腕前じゃよ。しかし今度こそは年貢の納めどきだ。さあ、リュパン、腕を見せてくれ」

ぼくは一瞬間ためらった。かれはいきなりぼくの右腕をたたいた。ぼくは痛いと叫んだ。電報にあったまだ全治しない傷を打ったのである。

さあ、しかたがない。ぼくはネリー嬢のほうをふりむいた。彼女は、青い顔で、よろけそうになって聞いていた。

彼女の目はぼくの目とかちあった。それから、ぼくが渡したコダックの上に目を伏せた。彼女ははっとしたような身振りをした。そしてぼくは、彼女が全部理解したのだという印象を受けた。いや確信を持った。そうだ、ぼくがガニマールにつかまる前に、用心して彼女の手にあずけたこの小さな品物の内部に、黒皮のせまい枠のなかに、そこにロゼ

ーヌの二万フラン、ジャーランド夫人の真珠とダイアモンドがあるのだ。

ああ！　ぼくは誓って言う――この深刻な瞬間、ガニマールとその二人の部下がぼくをとりまいたとき、ぼくには一切がどうでもよかったのだ。逮捕も、人々の敵意も、一切が。ただ、ぼくがあずけた物をネリー嬢がどうするかということ以外は。

この動かしがたい証拠をおさえられるなどということは、ぼくは恐れもしなかった。だがこの証拠を、ネリー嬢はかれらに渡すだろうか？

ぼくは彼女に裏切られるだろうか？　破滅させられるだろうか？　彼女は容赦ない敵としてふるまうだろうか、それとも、思い出を持つ女として、いくらかの寛大さ、いくらかの無意識的同情によって、軽蔑の念をやわらげる女として行動するだろうか？

彼女はぼくの前を通った。ぼくは何も言わずに、ていねいに頭をさげて挨拶した。彼女はほかの旅行者たちにまじって、ぼくのコダックを持ったままタラップのほうへ進んで行った。

「おそらく」と、ぼくは考えた。「彼女は人前をはばかっているのだ。一時間後、いや、もうすぐ、あの品を渡すだろう」

けれども、タラップの中ほどまで行くと、彼女はうっかりしたふうを装って、カメラを波止場の岩壁と船腹とのあいだの水のなかにおとしてしまった。

それから、彼女が遠ざかって行くのが見えた。

彼女の美しいすがたは、群衆のなかにまぎれ、それからまたあらわれ、そして見えなくなった。おわり、永久におわりだった。

ぼくはしばらくじっとしていた。悲しいと同時に、しんみりした気分だった。それから、ためいきをついた。ガニマールはおどろいた。

「とにかく、まっとうな人間でないというのは困ったものじゃ……」

以上のように、アルセーヌ・リュパンは冬のある夜、かれの逮捕のいきさつをわたしに語ったのである。偶然の出来事――その物語をわたしはいつか書くつもりだが――が、わたしたちを結びつけた。友情で、と言おうか？　そうだ、わたしはアルセーヌ・リュパンがわたしにいくらかの友情を抱いてくれた、そしてかれが時折りは不意にわたしの家にやってきて、わたしの静かな書斎に、陽気な快活さ、かれの熱烈な生活の輝き、運命にめぐまれた男の上機嫌をもたらすのは、友情のためだ、と信じたいのである。

かれの風貌！　わたしにどうしてそれが描けよう？　わたしは何度もアルセーヌ・リュパンに会ったが、そのたびにちがう人間のように見えたのだ……というよりは、ちがった鏡がおなじ人間のゆがんだ映像を反射するのであった。それぞれが特別な目つき、特殊な顔立ち、独特の身振り、固有のすがたと性格とを持っていた。

「ぼく自身でさえ」と、かれはわたしに言った。「もうぼくがだれだかわからないんです。鏡を見ても、自分がわからなくなりましたよ」

もちろん冗談で逆説だろう。しかし、かれに出あう人々、そしてかれの無限の秘策、かれの忍耐、かれの変装術、顔立ちを変え、顔の造作のあいだの関係までも変化させるおどろくべき能力を知らない人々に対しては、それは真理なのである。

かれはまた、こうも言った。「なんだって、一定の風采をしなくてはならんですかね？　いつも同じ人物であるという危険を避けては

いけませんかね？　ぼくの行為だけで、それがぼくだってことがわかりますよ」

それから、少し得意らしく、はっきり言うのである。

「これがアルセーヌ・リュパンだとは、だれにも断言できないのは結構ですよ。大事なことは、それをしたのはアルセーヌ・リュパンだと、まちがいの心配なしに言えることなのです」

わたしは、かれが親切にも、冬の幾夜かに、わたしの静かな書斎でしてくれた打明け話を基にして、そういう行為、そういう冒険のいくつかを、ここに再現しようと思うのだ。

獄中のリュパン

旅行家と言われるほどの人で、セーヌの岸べを知らない者、ジュミエージュの廃墟からサン・ワンドリーユの廃墟に行く途中、河中の岩の上に昂然とそびえているマラキの古い奇妙な小城を見なかった者はないだろう。その城は、橋のアーチで街道に通じている。くらい塔の下部は、それを支えている花崗岩——どこかの山からでもころがってきて、おそろしい地震のためにそこに投げだされたらしい大きな岩塊と一体をなしている。まわりでは、大河のしずかな水が、葦のあいだでたわむれ、せきれいがぬれた石ころの上でふるえている。

マラキの歴史はその名のとおり殺伐なものであり、その城のようすとおなじく不気味なものである。（マラキの音は、「悪くー不正にー獲得された」という意味に通じる）乱闘・攻囲・突撃・略奪・虐殺の歴史なのだ。コー地方の夜話では、そこでおこなわれた犯罪が、身をふるわせながら語られる、奇怪な伝説がつたわっている。むかしはジュミエージュの修道院や、シャルル七世の愛妾アニェス・ソレの邸宅につながっていた有名な地下道の話も出る。

英雄や盗賊どもの巣窟であったこの城に、今はナタン・カオルン男爵が住んでいる。かれが一挙にして巨富を獲得した取引所では、サタン（悪魔の王）男爵でとおっていた。マラキの領主は破産して、先祖代々の邸宅を二束三文でかれに売り渡さなければならなくなったのだ。かれはそこに、家具や絵画、陶器や彫刻のすばらしいコレクションを据えた。二人の老僕を使って独りでくらしている。外からはけっしてだれもはいれない。その古い広間で、ルーベンスの三点の絵、ワトーの二点、ジャン・ダージョン（ルネサンス時代の彫刻家）の椅子、その他、競売の常連である金持どもから紙幣たばにあかしてまきあげた数々の貴重品をながめた者は、一人もないのである。

サタン男爵はこわがっているのだ。自分のためにではなく、執拗な情熱をこめ、どんなに狡猾な商人でもごまかせない鑑識眼をもってあつめた、その宝物のためにこわがっている。かれはその宝物を愛している。けちん坊のように貪欲に、女にほれている男のように嫉妬ぶかく愛しているのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com